

犠牲者の表象を乗り越えて語り始めた女たち

—— 韓国京畿道における米兵相手の元「売春女性」をめぐる ——

徐 玉 子*

- 1 はじめに
- 2 韓国の売買春と基地村
- 3 語る
 - (1) 流入過程：一人になる / 基地村に足を入れる
 - (2) 仕事の形態と構造：「ヒッパリ」をする / 売春宿で働く / クラブで働く / 部隊バスに乗る / 契約同棲をする
 - (3) 子育て：混血児を育てる
 - (4) 国家による管理：性病検診 / 「教養講座」
- 4 つながる
 - (1) 婦女会と菊の会
 - (2) 「サンリット・シスターズ・センター」
- 5 抵抗する
 - (1) 花美里事件
 - (2) 売春女性が殺された時の抗議
 - (3) 靴の値段と女性の身体の値段との同一視に対するデモ
- 6 省察する
- 7 おわりに

1 は じ め に

本稿は、韓国京畿道における米兵相手の基地村¹⁾の元売春女性²⁾(기지촌 매춘여성 Kijichon mechunyeoseong) のあいだでのフィールドワークをもとに、犠牲者として表象されがちな売春女性の実態について論じることを目的とする³⁾。売春女性をめぐる最近の議論は、かの女たちの犯罪性についての議論を克服した点で共通するが、しかしなお大きく二つに分かれると言える。それらは「犠牲者」論対「行為者」論である [Moon 2004: 134]。前者はいかなる売春も女性は犠牲者であると主張する。売春は人間としての尊厳を否定し、自分自身を売り渡

* そ おくちや 京都大学大学院 人間・環境学研究科

す性奴隷制である [Barry 1995]。それに対して、後者は売春女性の犠牲者性を否定し、セックスワーカーという言葉を使って、ワーカーとしての権利を保証すべきだと主張する [Kempadoo & Doezeema 1998; Whelehan 2001]。売春は他の身体を使う労働——例えば、家事ヘルパー等——と何ら変わらないとしながら、セックスワークと心理セラピー、マッサージ、保育などの感情労働とを比較し [Chapiks 1997]、合法的に売ることができる身体的サービスと売春を区別するのは唯一スティグマだけであると主張した [Nussbaum 1998]。

売春女性を犠牲者と捉えたと、情弱で無気力だから保護が必要な存在という伝統的な女性像を強化する。他方、売春女性を労働者と見なすことは、売春という行為に作用するジェンダーやセクシュアリティをめぐるさまざまな力を無視することになる。また、行為者論は、売春が自発的であっても社会的な烙印を押されることを認めているわけだから、彼女たちの行為を正当化し、世間一般の支持を広げる戦略として、なお犠牲者として「偽装する」ことに意味があるろう [Sturdevant & Stoltzfus 1993: 379]。そもそも、より根本的な問題は、「犠牲者」か「行為者」か、という二者択一的な問いかけであると思われる。「犠牲者」か「行為者」かどちらかであるという分析枠組では、売春の現場での複雑な現実を捉えることができないからだ。一人の売春女性を取りあげても、視点によって、また機会に応じて犠牲者であったり行為者であったりするはずである。

現代の韓国社会のアカデミズムにおける売春女性の表象は、犠牲者の側面が支配的である⁴⁾。1961年淪落行為等防止法⁵⁾が制定されてから、長らく売春女性は、道徳的に墮落した者で、犯罪者あるいは違法者であると捉えられ、処罰されてきた。それらの状況から、売春女性のイメージを犯罪者、違法者から救い、彼女たちに売春を強いる、よりマクロな社会構造的な側面に目を向けようとする努力がアカデミズムを中心になされてきた。彼らは次のように主張する。売春女性たちは、「すべての罪の象徴として犠牲者にな」っている [Choe Byeongil 2004: 2]、彼女たちを「犯罪者、加害者ではなく、被害者として捉え」るべきである [Kim Hyeonsuk 2005: 11]。その理由は、売春女性たちは「家父長的な構造下で女性のセクシュアリティに加えられる統制と抑圧からの被害」を被った「売買春の被害者」であり [Kim Hyeonsuk 2005: 7]、その「背景には、自発的な意思により売春女性への道を選択したのではなく、歴史的な犠牲者として権力と力を持つ社会が女性たちに売春に乗り出すように強制した跡が多く見られ」るので [Choe Byeongil 2004: 9]、彼女たちを「家父長制的・男性主義的な社会構造の枠組みの中で、しかたなく売春に乗りだしたこの社会の被害者として認識」すべきだからである [Hwang Changyong 1998: 1]。

しかし、売春女性をたんなる「犠牲者」として説明することは、すでに指摘したように結果的に彼女たちを社会から排除し、無力な存在にしてしまう恐れがある。売春女性たちについての犠牲者のイメージが持つ一面性の問題を克服するために要求されるのは、具体的に売春女性

たちが自らの生についてどのような解釈と意味付与をしているのかに注目することである [Sturdevant & Stoltzfus 1993]。

そこで、本稿では、歴史的・文化的に沈黙を強要されてきた売春女性たちの声に耳を傾け、その語りから売春女性たちがたんなる社会構造の犠牲者であるわけではなく、そうした側面を持ちながらも、自ら自分たちの歴史を作っていく多様な行為主体（エイジェント）である側面を提示したい。

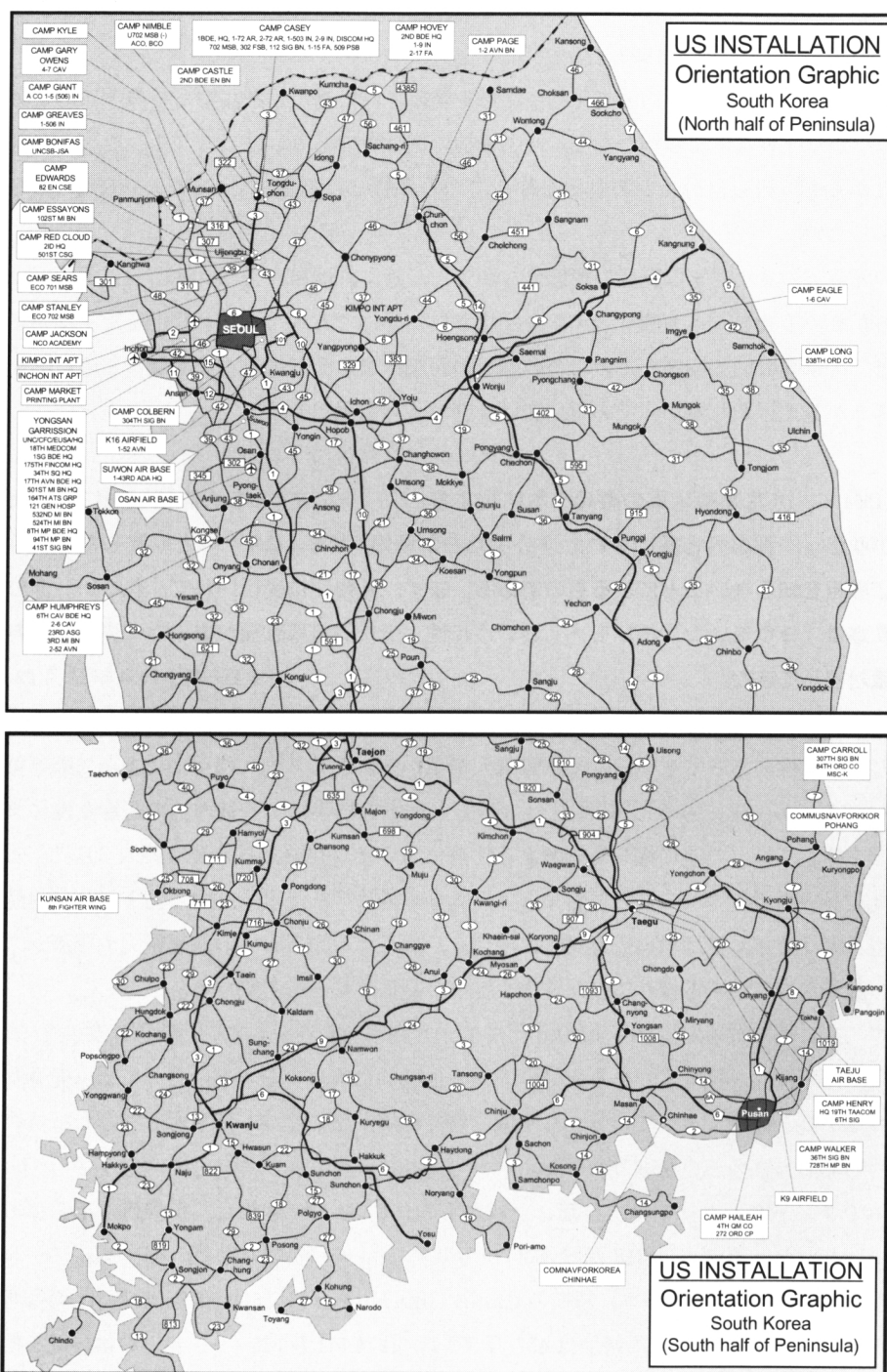
その際韓国のさまざまな売春の形態のなかでも、特に基地村の売春女性に注目するのは、彼女たちがその中でもっとも強くスティグマ化された集団であり、外国人兵士を相手に売春を行うことで国家間の利害関係とそのため国家の統制、またそれに対する彼女たちの対応が鮮明に浮きあがると思われるからである。次は新聞からの引用である。

（1954年）10月在韓米軍の撤兵が本格化すると……洋公主⁶⁾たちの職業戦線にも失職の風が吹き……都市へと集められた洋公主たちが私娼（韓国人相手）へと転業したという一説は真相を知らないことによるものである。まず、私娼側は受けいれてくれない。洋公主と私娼は「ヨウモノ」、「ホンモノ」という特性、伝統的職業意識がまったく異なり、お互い敵対視してきた。
（『東亜日報』1954年12月22日付）

同じ売春女性であってもその中には韓国人相手かそれとも外国人相手かによって階層意識が存在したことが確認できる⁷⁾。韓国社会は外国人兵士を相手にする基地村の売春女性により強く烙印を押し、社会の成員権をも剥奪する状況であった [Jeong Huijin 1999: 301]⁸⁾。このように社会から周辺化されることに留まらず、社会の外に押し込めようとする力とつねに対峙しながら生きてきた基地村の売春女性に注目し、外在する力としての国家権力や経済システムなどに翻弄されながらも繰り広げた連帯や抵抗の身振りなどを考察する。

まず、主に朝鮮戦争以後から1980年代まで米兵相手の売春をしていた韓国人女性27人の語りから、売春女性が犠牲者であるという表象を批判的に検討する。事例としては、売春女性たちのつながりと連帯、そして自分たちを取り巻く環境が厳しくなる度に示してきた抵抗例、自己についての省察の三点を取りあげる。

本稿のフィールドワークは、首都ソウルから南に約80 Km離れた、京機道の平澤にある基地村で行われた。平澤には218万坪（約719万平方メートル）規模のOsan Air Base (K-55)と150万坪（約495万平方メートル）規模のCamp Humphreys (K-6)、射撃訓練所、通信所、弾薬庫がある。この五つの米軍基地は457万8千坪（約1,511万平方メートル）の供与地を使用しており、12,091名の米兵と軍属が駐屯している [Kim Yonghan 2003] (図1)。フィールドワークを行った花美里（仮名）はK-6周辺に形成されている。2005年3月末現在人口は、



出典：在韓米軍のホームページ www.korea.army.mil

圖1 在韓米軍基地



写真1 タ方明かりを灯しはじめたクラブ街



写真2 ショッピング・モールの看板

7,406名である⁹⁾。そのなか、基地と直接関わっているのは、米兵の日常消耗品を調達する商店と、米兵に部屋を貸すレンタル業、または米兵の Rest & Recreation に関わるクラブやバー¹⁰⁾の経営に従事する人々である。村には11軒のクラブと28軒のバーがある（写真1～3）。

花美里で元売春女性と接した期間は2005年3月から10月まで約8ヶ月間である。以下にその状況を簡単に説明しておきたい。

私は花美里に住み込みをしながら、NGO 団体にボランティアとして仕事をし、元売春女性たちと日常的に接点を持ちながら生活することができた。彼女たちとのインタビューは、すべて各家を訪問して行われた。



写真3 アメリカ独立記念日の夕方

2 韓国の売買春と基地村

韓国の売春女性に対する最初の文献記録に表れた高句麗時代（BC 37～668）の「遊女」、高麗時代（918～1392）から朝鮮時代（1392～1910）までの「官妓¹¹⁾」、そして官妓出身の女性たちが経営する料亭での両班¹²⁾と商人相手の売春が行われたという歴史的事実がある。しかし、近代韓国の売買春の日常化と大衆化は、特に日本植民地時代の公娼制度の認定、朝鮮戦争とその後の米軍の駐屯、そして、韓国経済の「従属的發展」という三点にその原因を求める人が多い¹³⁾。彼らは次のように説明する。

日本が植民地時代に自国の公娼制度を韓国内の日本人居留地域に導入しはじめ、1916年に

は韓国社会の売買春を統制するために公娼制度を認定するに至った。そのため、以前は少数の支配層でだけ行われていた買春が、一般の男性に広まる結果となった。その後、1945年米軍が日本植民地からの解放軍として韓国に入り、1947年「公娼制度等廃止令」により公娼制度はなくなるが、その代わりに私娼が米軍駐屯地域の基地村を中心に盛んになる。それに、朝鮮戦争（1950-1953）で夫を亡くした女性や両親を失った孤児たちが、生計を維持するための最後の手段として売春を選択したりして売春女性数が増大した。そして、1960年代以降韓国の経済発展が女性の性的サービスを通して女性を利用し、他方で経済発展そのものがこうしたサービスの助長に帰結したものであるという、両者の弁証法的関係により韓国の売買春の経済規模は拡大し、現在に至っている。

基地村の売買春は米軍が韓国に上陸した時からつねに存在し、韓国現代史の中で売買春の確固たる類型の一つであり続けた。それは祖国を解放してくれた友邦国の軍隊に支払える「社会的費用」としてみなす一般認識が形成されていたからであった¹⁴⁾。それに、韓国政府側には次のような二つの理由が存在した。

朴正熙は「革命」政府の道徳的なイメージを強調する事業の一環として淪落行為等防止法を1961年に制定した。しかし、その翌年売買春を例外的に許容する104箇所の特定区域が設置される。その大半は米軍基地村であった。韓国政府が基地村の売買春を許容した理由の一つは、経済発展のためには何よりも外貨が必要だったからであり、まだ産業基盤が微々たる状況であった当時の韓国政府としては基地村での売春は「元手なしで外貨を獲得する方法」であった。

もう一つの理由は1969年のニクソン・ドクトリンと深く関連する。「アジアの防衛はアジアの力でしなければならない」という内容のニクソン・ドクトリンが発表されると、基地村の女性たちには「ドル稼ぎの産業役軍」以外に「民間外交官」というもう一つの大きい職務を任されることになる。1971年在韓米軍2万名が撤退完了した状況で「民間外交官」は、白人と黒人を差別しないで、性病管理も徹底的に行い、「綺麗な」状態で、国の平和のために戦う米軍を満足させなければならなくなった。米軍がそれ以上撤退しないで韓国に駐屯できるようにという政府側の配慮である。そのために、韓国政府は1972年から「基地村浄化事業¹⁵⁾」を行い、この「民間外交官」たちを教育し管理しはじめた。この過程で基地村の女性たちはより厳しい国家の統制下に置かれた（写真4）。



写真4 「洋公主」を描いた映画『Silver Stallion 1991』のポスター

3 語 る

この節のデータは、ほとんどが元売春女性たちへのインタビューによって得られたものである。ここで最初強調しておきたいのは、彼女たちにとって、外部のものに自分たちの過去を語るということは、きわめて重大な決意がいるということである。

金蓮子氏（62才）は、「25年間基地村で働いたが、私たちはつねに忘れられた、いや、忘れられるべきであり、見えぬべき存在であった」と言った。そのような「忘れられ、見えぬべきである存在」に会って、話を聞こうというのが本研究のねらいであった。本フィールドワークは無知¹⁶⁾の世界にたどり着いて今まで見えなかった人々に出会い、語らない人に話しかける作業であった。最初は、元売春女性たちに、「昔の話をしたくない」、「それを思い出そうとしたら頭が痛くなる」、「全部忘れた」、「思い出したくない」という言葉でインタビューを拒否された。しかし、顔をあわせる時間が重なるにつれて、だんだん自分のことを語り始め、最後には「私の話を聞いてくれてありがとう」と言われた。時に私たちは一緒に泣き、一緒に笑った。彼女たちは語らない人だったのではなく、耳を貸されないことから沈黙を強要されていたと言える。私に語るという彼女の行為自体がたんに情報伝達ではなく行為主体的な（agentic）ものであることを強調しておきたい。

この節では、元売春女性の語られた経験を、基地村への流入過程、仕事の形態と構造、混血児の養育、そして外国人の兵士を相手にする売春という仕事のために国家から管理されていた側面に分けて再構築する。かの女性たちは1950年代から80年代にかけて、米軍基地村で米兵を相手に売春を行い、「洋公主（양공주 yanggongju）」、あるいは「洋セクシ（양섹시 yangseksi¹⁷⁾」と呼ばれた人たちである。基地村への流入過程を取りあげることで、売春の「自発」対「強制」の議論を問いなおし、多様な仕事の形態と構造を取りあげることで、基地村売春女性に関する一面的なイメージが変わる可能性を指摘したい。混血児の養育を取りあげることで、子どもを養子としてアメリカに送った理由は養育能力の不足だったのかどうかを問い、国家からの管理を取りあげることで、基地村の売買春への国家の関与とそれに対する女性たちの対応を考察したい。

（1）流入過程

一人になる

伝統的な儒教思想の教本の一つである『儀礼』に「三従之道」という婦人の徳目がある。幼いときは父に従い、結婚したら夫に従い、年老いたら息子に従うという意味である。それは、女性は直接世界と関係を結ぶことができず、必ず男性を通してしか関係を結ぶことができないことを暗示している。だから、女性が一人になり、女性自身直接世界と関係を結ぼうとするの

は、韓国社会においては大きい挑戦であった。

19 歳に仲人が人を紹介し、結婚しろと言われたけど、私は嫁に行くのが嫌だった。私は結婚するのが嫌だった。母の暮らしを見たら別に（結婚がいいと思わない）。それで、村の友達四人、なかに都会生活を経験してきた子がいて、私たちここの田舎から逃げてソウルに行こうと。
(金順礼¹⁸⁾さん、51 才)

子供が生めないと追い出された。子供が生めないと、姑のいじめが酷くて耐えられず家出をした。……実家に戻ったらお兄さんに殴られた。「夫のことを考えて我慢すべきなのに、（家出をして）家の名誉に泥を塗る」と。お兄さんも昔の人だから。私と 10 歳違うからお父さんみたいで。それで、実家からも出て仕事を始めた。工場で働いたりした。あまり経験がないからあっちこっち回って。
(朴蓮花さん、65 才)

20 歳に仲人の紹介で嫁入りして苦労した。約三年間、実際一緒に住んだのは一年ぐらい。あっちこっち通いながらあの女この女と付き合っ、やがてある女とは一緒に暮らしはじめて、家にも帰らなくなった。それで、逃げて家を出た。どうやってその人間（夫）と暮らすの？
(金貞淑さん、68 才)

女性たちが一人になることを決心した理由は様々であり、なかには朴蓮花さんのように積極的な選択ではなかった場合も含まれている。理由には、結婚に対する反感、結婚したが出産ができないための離婚、そして、性二重規範に対する反感などがあり、家父長的な社会に挑戦し、自立しようとする女性たちの強い意志が認められる。

基地村に足を入れる

一人になった女性は住み込みの家政婦などの仕事を経て基地村にたどり着いた。

李明子さん（63 才）は、ソントンの基地村でまず 1 週間を過ごして、仕事の内容を把握した後、自分にはできないと判断して辞めようとした。しかし、子どもの養育費は要るし、離婚経歴のある子持ちにできない仕事などないと考え直して花美里に来るようになった。このように、その選択が積極的な選択であったとは言えないにしろ、必ずしも全てが人身売買のような強制的な形をとっているものでもなかったことがわかる。

この場合ある女性の売春行為が「自発」であるか「強制」であるかを問う時、重要なのは、彼女を自発的な売春女性として分類することから生じる政治的な意味と結果に注目することである。その背景にあるのは従軍との差異化である。つまり、「従軍慰安婦」は「強制」であっ

たのに対して「米軍慰安婦」は女性自身による「選択」であったと語ることによって、その選択の責任は個人に帰属させられるのであり、個人の道徳的な堕落だから非難の対象になっても当然であるという結果になる。このような、選択という言葉を使う危険性に充分注意しながら、「選択の帰結である責任」という観点ではない、女性を束縛する家父長制社会に対する挑戦として生きる「選択」という風に、より積極的な意味をすくい取ることが必要である。

（２）仕事の形態と構造

基地村に足を入れたら基地村がどのようなところか全然知らなかった人はもちろん、ある程度予想できた人もその環境に適応する必要があった。そこは韓国にあってアメリカのような場所、韓国とアメリカの力の不均衡が再現される場所であったのである。

スッコゲ（一つの代表的な基地村）というところに行ったら、白い人黒い人が道に溢れている。何だかすごく怖かった。（金恩礼さん、58才）

金恩礼さんは、初めて白人や黒人に会って、その容貌が異なるだけですごく怖さを感じたと言う。結婚したくなくて家出をし、都会で仕事をしている友人を捜して来たのだが、その友人は米兵と同棲中だったのである。ほかに行くところもなく部屋を一つ借りて生活していたら、友人の同居人には慣れてきて怖くなくなった。だんだん慣れてきたとき、その同居人にエスコートされた。そして、基地内の将校クラブで副司令官と知り合いになって、後に契約同棲を始める。金さんは、その副司令官が気に入ったのもアメリカ先住民の人で容貌が韓国人と似ていたからだと言う。

花美里には二十四歳のとき来た。最初は怖くて。西洋の言葉で何とか何とか、全然理解できなくて。少し時間が経つと慣れてきた。（朴潤寧さん、61才）

（言葉が）全然分からなくて、身振り手振り全部動員して。分からないから、ハングルで全部書いておいた。それで一つ一つ覚えた。（鄭純愛さん、65才）

（金さんに、）「オンニ¹⁹⁾、『オビバー』²⁰⁾で働いて、子供の養育費送って、どうやって食べて生きるの？ どうせここまで出てきたから、『ウェイトレス』²¹⁾をすれば？」と誘われて、私は、「そんなのできないよ」って（言った）。そしたら、「まだ苦勞が足りないみたいですわね」って。それで、決心をしてウェイトレスになった。当時米軍は多いし、そろそろ入ってきてテーブルに座ったら、オーダーを受け取らないといけないのだが、なんと云え

いか分からなくって、米軍が入るたびに怖くて震えて、どうすればいいのどうすればいいのと。そしたら、あの子がノートにずらりと書いてくれた。私がウィスキーとか飲んだことないから、手のひらにドリンクの名前を書いてくれた。それで米軍が来たら、「Can I sit down? What do you wanna drink?」と言ったら、オーダーをする。それで、ドリンクを持って行ってあげたらチップをくれるの。最初は恥ずかしくてそれが受け取れなかった。そしたら、Miss Min と呼んでお金をくれるの。当時私たちは名札をつけるようになっていた。それでも、初めてのテーブルは何とかオーダーを受け取るのができる。しかし、同じテーブルに空き瓶を片付けて次のオーダーを取りに行くのが怖かった。何と言えはいか分からなくって。怖くて恐ろしい人たちを相手にするから、言葉も足りないし。

（旻慶熙さん，63才）

基地村で仕事を始めたばかりの女性たちは、まず顔つきや体つきなど外見の相違から居心地悪さを感じ、次には実際仕事をする上で「西洋の言葉」が全然分からなくて困ったと言っている。英語は、大体先に仕事を始めた先輩から基本的な表現を教えてもらい、後はその場で慣れていくような方法しかなかった。

基地村で米兵を相手した売春女性は大体以下の五つの類型に分けられ、契約同棲をする女性を頂点に、部隊バスに乗る女性、クラブで働く女性、売春宿で働く女性、「ヒッパリ」をする女性の順にランク付けられていた。

「ヒッパリ」をする

ヒッパリ（힙파리 hitpari）²²⁾ は、基地村の売春女性の中でも一番低いランクのグループである。道端で直接米兵と交渉して売春を行い、料金も他のグループの女性より低かった。

売春宿で働く

売春宿（포주집 pojupip）で働く女性たちは、オーナー（포주 抱主 poju）とは負債関係にあることが多いため厳しく管理されていた。収入の半分以上をオーナーに渡す代わりに、部屋と食事を与えてもらう。しかし、負債は高い利子のせいで増えていき、返済できない。だから、ずっとそこにとどまるしかない仕掛けになっていた。負債を返済する方法は、健康であり借金する理由がなかった人か、もしくは米兵に気に入られ、同棲を条件に返済してもらうなどであった。幸い自力で負債を返済できて一人で独立して働き始める場合でも、3ヶ月から6ヶ月収入の半分以上をオーナーに上納した後で本当の意味で自立ができたという。

クラブで働く

村のクラブでは「オビバー」と「ウェイトレス」が女性の仕事であり、売買春は個人的な交

渉により行われた。女性が基地村で一番やりやすい仕事がオビバーであったようである。バーの内側でビールのふたを開けるのが仕事の内容なので、ウェイトレスのようにテーブルの席に座らなくても済むから初心者にもつとめやすい。

ここに来て一ヶ月、知り合いが DMZ クラブ、今の USA クラブで働いていた。私は夜そこでお酒を飲んだりしていたが、知り合いの人に、「どうせそのように時間をつぶすようだったらオビバーでビールのふたでも開ければお小遣いでも稼げるじゃない」と言われて、……始めた。お金に余裕がない。クラブで働く女性は米軍相手²³⁾をしないと給料だけでは厳しい。そして、皆米軍相手していたし。それで、私もオビバーにいる間も私に気がある人を相手にしたり……。 (李春月さん、61才)

李春月さんの語りから分かるように、オビバーもまた売春とは無関係ではなかった。

部隊バスに乗る

毎日夜7時に基地正門の前に基地内のクラブへと女性たちを運ぶバスが停まっていた。このバスに乗る女性たちは毎週欠かさず性病の検診を受け、「クリーン」（未感染）を証明するパスを持ち歩かないといけなかった。女性たちが集まると、自治会の幹部が一人一人のパスを確認してから、バスは基地内に入る。まだ時間が早いからクラブにお客はあまりいない。女性がそれぞれのテーブルに分かれて座る。後から勤務を終え、私服に着替えた米兵男性がクラブに入ってきて、気にいった女性のテーブルに相席し、ドリンクを買ったり、食事を買ったりしながら、様子を見る。そこで、交渉が成立すると基地の外にある女性の部屋で一晩泊まる。松美英さんは基地のクラブで男性と一緒に部屋まで入ったが、値段の交渉がつかずその男性を部屋から追い出したため、彼は外泊できず基地に遅く戻ったので門限を破ることになったというエピソードを聞かせてくれた。バスに乗る女性たちは、わりと自由に仕事ができたとする。

契約同棲をする

契約同棲を始めると、働かなくても同居人が家賃と生活費を払ってくれるから生活は楽になる²⁴⁾。契約同棲の期間は、米兵の韓国での滞在期間が大体1年だったから、1年以内というのが普通であった。この形の同棲は、必ずしも恋愛感情に依拠するものではなかった。しかし、お金がすべてだったとも言えない。米兵の方も異国での寂しさから親密な関係を求めていたし、女性も、お金が目的であっても「一緒に暮らすと感情が生まれるもの」としばしば語った。

一般に基地村売春の形態と構造については知られていない。そのため、彼女たちを犠牲者と

して語るときイメージされやすいのは、売春宿での厳しい監視のもと借金を返済すべく過酷な状況で働き続けるしかない女性たちである。しかし、その他の形態の女性たちに注目すれば各自自由に交渉してお客を選べるし、代金も直接女性が受け取っていた。このように犠牲者像からこぼれ落ちてしまう仕事の形態と、そこに従事していた女性たちに注目すると基地村売春について新しい理解を得られるかもしれない。

(3) 子育て

混血児を育てる

売春女性が子どもたちを成長するまで育てあげたケースはあまりない。どうしてだろうか。売春を始める前に韓国人男性との間にもうけた子どもを立派に育てたことを考えると、養育能力の問題ではなく、子どもが混血児であるという特殊な条件がより強く作動していることが推察できる。

6歳まで私が育てた。「アイノコ」(아이노꼬 ainoko)で混血児だと(ののしられ)村の子どもたちと喧嘩した。我が子は力も強くなかったので、殴られて泣いて帰ってきた。(子どもたちが)「このヤンキーの子」とか言ったので、私が、「あなたが我が子に食べ物を与えたか、洋服を与えたか」と言いながら叱った。そのことで胸を痛めた。

(李惠淑さん、72才)

韓国で、自分で子育てを諦める背景には、混血児(혼혈아 honhyeola)²⁵⁾に対する酷い差別があった。一般的に「肌の色が異なるということは、貞操を売りわたした母親のためにもっと卑しい」存在という扱いを受けた[『東亜日報』, 1958年1月26日付]。それだけでなく、国家の混血児政策もあった。それは、特別な養育支援制度や教育施設を作ったり、母子家庭を救護したりすることではなく、海外に養子として送りだすことだったからである。保健社会部は、父権を尊重して「黒」でも「白」でもアメリカの国籍を持たせるべきだとした。韓国政府は、肌の色が異なることは教育上大きなハンディ・キャップになり、当時の教育実情と環境のなかで混血児たちが十分な教育を受けることができないと判断している。そこで、混血児をアメリカに送りだすという政策を取った。このような政府の混血児対策は、混血児に比較的よい環境を提供するという意味もあったが、「純粋な血筋を汚した排泄物」の清掃という性格の方がもっと強固だった[Yi Imha 2003: 166]。一般の差別と国家政策は連動している。しかし、以下に見るような噂も流れていた。

(どうやって養子に送ったんですか) 70年代に北朝鮮の金日成がソウルに来て年のお祝いす

るという噂が、韓国全土にあった。たぶんあなたは知らないでしょ、若いから。70年代に金日成がソウルで年のお祝いをすると、そのとき「アイノコ」を先に全部殺すと。それで花美里の「アイノコ」は皆（アメリカに）送られて、二人しかいなかった。友達に、「オンニ、私の子、メギも送った。金日成が「アイノコ」から殺すって、どうする？」と聞かれて、送るしかないと。その友達が手続きを教えてくれた。……私は金浦空港までついて行った。……何月何日何時の飛行機。アイオワ州に行ったことも知っていた。その後、自殺しようと薬を飲んだ。一週間ぶりに目覚めた。私は生きのこった。（孫貴正さん、76才）

孫貴正さんのこの噂をめぐる話の真相はつかめていないが、それがもし思いこみであったり、記憶の作り変えであったりしても、ここから彼女の子どもをアメリカに送らないといけなかった切実な思いが表現されている。送らないと子どもの命さえ保証できないという危機感を感じる。それは厳しい世間の視線の中で子どもがよく育つことができず、ひょっとしたら命さえ脅かされるかもしれないという現実認識である。

それにしても北朝鮮の金日成に一番先に殺されるのはどうして「アイノコ」なのだろうか。普遍的に女性は自分が属する民族によって再生産が勧められたり、制限されたりするだけでなく、異なる民族の男性との性交渉も許されない。そうすることによって、各民族の境界線が守られると考えられるのである。ところが、基地村で米兵を相手にする売春女性はその性交渉から、韓国人でもアメリカ人でもあり、韓国人でもアメリカ人でもない混血児を生み出すことでその境界線を脅かしていると捉えられる。メアリ・ダグラスの「場違い」の概念を援用すれば、境界的存在としての混血児に「汚れ」の念が抱かれることも容易に説明できるだろう〔ダグラス 1985（1969）〕。この「汚れ」の念とそれを真っ先に払拭したいという願望の間に何らかのつながりがあるのは明らかである。

強い烙印を含む厳しい環境のもと、混血児の子どもを韓国で育てたケースも少ないながらある。李智洙さん（22才）はアフリカ系アメリカ人との混血であるが、中・高校を通してアイスホッケーの選手として活躍し、短期大学を卒業した。金賢景さん（17才）も同じくアフリカ系アメリカ人との混血である。学校の成績も優秀で、絵を描くのが特技である彼女は、級友からのいじめにもめげない明るい性格の持ち主である。二人とも母子家庭で育てられた。

なお、子どもをアメリカに送ればそれで親子関係が切れるというわけではない。子どもをアメリカに養子として送った後も今まで親子の関係が続いているケースを三人確認できたからである。すべて子どもが10才以上になってからアメリカに送ったケースで、ずっと手紙や電話で連絡を取りあっていた。現在も孫たちにクリスマスのプレゼントを贈ったり、アメリカから訪ねられたりと家族の関係を継続している。

（４）国家による管理

基地村の売春女性たちは外貨を獲得する「産業役軍」として、そして、また「民間外交官」として国家から管理された。ここではそのような管理はいかに行われたのかを、性病検診と教養講座を中心に引き上げ、女性たちの意見や対応を考察する。

性病検診

売春女性たちは毎週一回強制的に性病検診を受けなければならなかった。その強制的な性格は、すでに述べたように、クラブに出入りする際にはパスと呼ばれる性病検診証を見せなければならなかったという事実によって端的に認められる。地域によっては、毎日検診番号を、左胸の上に着用しないといけないところもあった。クラブで働く売春女性はすべてその番号を胸の上に着用するようになっており、もし米兵を拒否したり、丁寧に扱わなかったりしたら、米兵がその番号を部隊内に告げ、部隊ではクラブのオーナーに警告をする。それが三回だとクラブがオフ・リミッツ²⁶⁾になる仕組みであった [Moon 1997]。また、基地村を歩いていたら急に警察に止められ、パスを見せるように要求されたこともある。そのときパスを所持していなかったら警察に連行された。これ以外に、性病にかかった兵士たちによる証言で連行されることもあった。まず、彼らに売春女性の写真付きリストをわたす。彼らが性病を移されたと推察した女性を選ぶ。そうすると、憲兵たちが女性のところに駆けこんで有無も言わずに隔離収容所に送ったのである。しかし、米兵が一人の女性と関係を持つとは限らないので、写真チェックの過程で過ちが起こり、濡れ衣を着せられる女性も出てくる。このような問題に売春女性たちが抗議をした事例もある。

検診に合格できなかったら隔離収容所みたいなところで治療を受ける。外には出られない、建物の中で生活する。同居していた場合は男が面会に来たりもした。そこで注射を打ってもらって、薬を出してもらって。（そこで性病以外の健康状態もチェックしますか？）いや、そんなのはなくてひたすら子宮だけ。（金慶子さん、66才）

性病にかかったらすぐ隔離収容所に入れられ、完治するまで外には出られない。仕事の性格上、彼女たちは性病以外にもいろいろな病気を患っているはずなのに、ひたすら性病だけを管理しようとしたのは、その措置自体が売春女性の健康管理のためではなかったことから明らかである。彼女たちはこのような強制的な性病検診が孕んでいるさまざまな問題に気付いていた。彼女たちはよくこの言葉を口にした。

私は自分の性器が自分のものだと思っていたのに、そうではなく国のものだった。

売春女性たちは絶対的に巨大な権力である国家の管理に対して正面から抵抗することは不可能だったかもしれないが、少なくとも自分の身体が国家によって管理されるという不当さを認識していた。

「教養講座」

月に一回、基地村の売春女性を集めて教養講座というのが行われた。そこに喜んで参加する女性は少なく、パスを没収されないため席を占める状況だった。郡守²⁷⁾、保安課長、平澤郡庁の福祉課長、婦女会（後述）の会長がマイクを回しながら講演をしたが、内容はいつも繰り返してであった。その内容は次のようなものであった。

皆さんは愛国者です。勇気と誇りを持ってドル獲得に寄与していることを忘れてはいけません。私は、皆さんのような隠れ愛国者に感謝しております。米軍たちはわが国を助けるために来ているので、皆さんはその前で綺麗に着飾って、低俗で汚い言葉は使わないようにして下さい。それで、有名な英語の先生にお越しいただいていますので、しっかり英語を習って帰りましょう

[金蓮子 2005: 123]。

この形の教養講座が行われた背景には、1960年1月国会での発言に現れたような、国家安保の名分のため基地村を養成し、米兵相手の売春を許容すべきだという考え方がある。また、国会議員たちは、米兵に性的サービスを提供する場所だけを黙認するに留まらず、売春女性に対する教養教育も強化すべきだと提案している。

外国軍人を相手にする売春女性の存在は避けられないことだと思います。……外国人を相手にする人に対しては、その「アメリカの」民俗「文化」や言語などの教養を高めて……質の向上に努めることはできないか……（第4代国会第33回第12次内務委員会でのJ議員の発言。[Jang Pilhwa 1999: 168] より再引用）

国家は教養講座を通して売春女性たちを自分たちの論理で管理しようと試みた。しかし、売春女性たちはそのような論理にすんなりのせられたわけではなく、誰一人も自分が「愛国者」であると肯定した人はいない。そして、英語講座の時には、「この退屈な時間はいつ終わりますかは、英語で何と言うんですか」などの質問で皆を笑わせ、教養講座の滑稽さを皮肉った [金蓮子 2005: 125 - 126]。

他方、女性たちは教養講座の前後の時間を利用し、新しく加わった人に早いうちに転職するように説得した。

このように性病検診と教養講座は、売春への国家の介入を証明するものであるが、その意図がうまく受けいられたわけではなかった。

以上、元売春女性たちの語りからその経験を基地村への流入過程、仕事の形態と構造、子どもの養育、そして国家からの管理に分けて見てきた。元売春女性のライフ・ヒストリーのさまざまな経験の語りの中でも特に四つの場面に注目したのは、まず、流入過程を通して売春の「自発」対「強制」の問題を問うためであった。次に、仕事の形態と構造を五つに分けて言及したのは、仕事の各々の形態と構造のどの部分に焦点を当てるかによって基地村売春女性に対する言説やイメージが変わる可能性を指摘したいためであった。また、子どもの養育に対しては、幼い自分の子どもをアメリカに養子として送るしかなかった状況が、たんに子どもの養育能力の欠如から起因したものではないことを確認したいためであった。そして、最後は、基地村の売買春の管理と育成への国家の関与とそれに対する女性たちの対応を考察したいためであった。

4 つ な が る

基地村の元売春女性たちは現役として働いていたときにはもちろんのこと、売買春とは何ら関係を持たなくなった現在も同じく、強く烙印を押されている。それによって、彼女たちは周辺化されるだけでなく、社会から追い出そうとする力とつねに対峙して生きてきている。このような状況でお互いの立場を理解しあい、力をあわせられる人とのつながりが必要になる。ここでは基地村の女性たちがどのように連帯を模索してきているのかについて考察する。

(1) 婦女会と菊の会

1960年代初期に多くの基地村に自治会が生まれた。これらの動きと軌を一にする形で花美里にも婦女会という名の自治会が1962年（推定）に出現した。これらの自治会は、オーナー、米軍、地域当局者たちとの関係からクラブの売春女性の権益を擁護するための支援集団として機能した。

その時は菊の会じゃなくて婦女会（という名前だった）。女性たちから毎月会費を徴収するけど、それは誰が使うのではなく、セクシたちが死んだり、病気で入院したりした時使った。最初は、ここにセクシも多いし、事故も多いのに、村人はあまり力になれない。だから、役員になってもらえそうな人を立てて（婦女会を）作った。私が25、6才のとき作られた。

（朴月純さん、68才）

朴月純さんは確実な年代は覚えていないが、自分が花美里に来てから何年か後（1962年頃）婦女会が結成され、米兵を相手にする女性たちを組織化し権益を保護しはじめたと語る。売春女性という状況を悲観して自殺する女性、米兵に暴行をされる女性、殺害される女性など、花美里では女性に関連する深刻な問題が頻発したが、誰も面倒を見る人がいなかった。それで、女性たちは婦女会を作った。しかし、このような自治会の結成を助けた政府の側には別の目的があった。自治会を利用して女性たちを管理しようとしたのであった。特に韓国政府は性病管理が自治会を通してなされることを期待していた。

しかし、政府側の目的は何であれ、一旦基地村の女性たちが集まる組織ができると自然に自分たちの権利を擁護する活動を行うようになった。自治会は嘔の診断を下す病院に抗議したり、売春女性の人権侵害に対して大規模のデモを組織したりするのに中心的な役割を果たした。そして、病人の世話をし、死亡事故や事件があった場合その処理も受けもった。もしそれが米兵の暴力によるものであったら抗議デモを行った。

各会員たちは自治会に毎月会費を出したが、それは、死亡した会員の葬式費用や病気になった会員の治療補助のように、緊急事態のための資金として使われた。自治会が会員たちのためにどれくらい積極的に活動するのかは、その組織の代表である会長がどんな人物かによって左右された。会長は、自身の地位を利用して、女性たちが搾取されないように影響力を発揮することができた。しかし、それと同時に米軍側や地方政府側の言いなりになり、性病検査を強制する一方で、病院と癒着し、女性たちの収入を不当に搾取することに加担する場合もあった。ときに売春女性の代表として、ときに政府の手先としてふるまったのである。自治会は80年代後半以降基地村の景気衰退とともに姿を消した。

1992年花美里では「菊の会」が新しく結成されたが、今度は年を取って一人暮らしをしている（50代以上の）元売春女性を中心にお互い世話をしたり、訪問したりする自助を目的としていた。現在会員数は60人あまりで、会長一人と総務一人の幹事がいる²⁸⁾。幹事は会員の生活、病歴、家族関係などにも詳しく、会員が救急車で病院に運ばれるなどの緊急事態が発生した場合、一番早く事態を把握し適切な処置を行う。最近では会員の高年齢化につれて、訪問しあうとき死亡を確認することもあり、役場の福祉担当者とのやりとりで葬式の日取りや参加を決めたりもする。

会員の金英熙さん（64才）は喘息のため病院で過ごすことが多かった。チュソク²⁹⁾も近い日に金さんはまた入院した。その間役場からお米の配給があった。チュソクを前にして上質のお米20kgが届けられたが、それを家主が人に半分にも満たない値段で売りわたしてしまったことが分かった。金さんがまだ病院にいる間、それを知った会員たち何人かは、金さんの家主に会って、どうしてそんなことをしたのか聞いた。それで、家主は同じ等級のお米を買ってかえた。小さいことではあるが、会員たちがお互い仲間意識を持って権利を守ろうとする姿が垣



写真5 Sunlit Sisters' Center Picnic
西海岸の海を背景に



写真6 Sunlit Sisters' Center Picnic
サファリ・ワールドの入り口で

間見える事件であった。

（２）「サンリット・シスターズ・センター」

サンリット・シスターズ・センター (Sunlit Sisters' Center) は基地村の売春女性たちと子どもを助けるために 2002 年 6 月に開園したメソジスト最初の基地村宣教センターである。現在このセンターでは、女性たちが長い間受けた精神的な苦痛を治癒するために専門家を呼んで「アート・セラピー」や「ダンス・セラピー」などを行っている。また地域の病院と連携して女性たちに無料歯科治療や、ボランティア活動家による自宅訪問相談も行っている。毎週火曜日には定期的な集会と共同食事があり、女性たちはこの集会を利用して誰が病気なのか、誰がどんな問題に直面しているのかなどの情報を交換する。

会員の女性たちは、最初はセンターに出入りするのに違和感を覚えていたが、今は火曜日が特別待ち遠しく、集会を楽しんでいることは間違いないように見える。しかし、「センターに出入りする人」になることは勇気が要るのかもしれない。サンリット・シスターズ・センターは過去に基地村で働いていた売春女性を対象にしているから、センターに出入りをするのは自分の過去を明かすものと等しい。だから、センターの集会に出るということはそう簡単なものではなく、それ自体ある程度の勇気を必要とする行為なのである。それでも会員の女性たちは毎週集会での人との交流を楽しんでいる（写真 5, 6）。

むしろセンターに行くのが楽しみ。その日が待ち遠しくて、ほら、私はいつも早めに行くでしょう。でも、周りの人たちはきっと言うでしょう。あの女はサンリット・センターに行く女なんだと。私たちに聞こえるところでは言わないが、気がつくものでしょう。でも、私はその日が待ち遠しい。

（朴点禮さん、68 才）

5 抵抗する

この節では、売春女性たちが連帯し、抵抗してきた事実に注目する。ここでは、すでに女性の語りから明らかになったような、顧客との関係にみられるような個人的な抵抗については言及しない。もちろんすべての売春女性が連帯の呼びかけに参加するとは言えない。それにもかかわらず、300、600、1,000 余名の売春女性たちの生存をかけた闘いに注目したい。本稿では詳しく記述しない事例としては次のようなものが確認された。不当に収入を増やそうと嘘の性病診断を下す病院等を訴えた事例、病院で抗生物質の投与後死亡した女性の事件を検察庁に告発した事例、性病に感染した米兵の一方的な証言により隔離収容所に送られる不当さに対して抗議した事例、売春宿のオーナーに負債を返済するため女性同士で結成した金融自助組織「契」の運営事例などである。

次は花美里の売春女性たちが村人と一緒になって米軍当局のオフ・リミッツ処置に対して行ったデモである。

（1）花美里事件

1971 年 7 月 9 日から 10 日にかけて、花美里で黒人兵士と韓国人の間にいざこざが発生して、10 日に米軍当局は村へのオフ・リミッツを命令した。そうになると、米兵が村に来ないから韓国人たちは商売ができなくなる。この不当な処置に対して 100 から 150 人の売春女性が 13 日から始めたデモが、8 月 9 日まで約 600 人の売春女性と 3 千人の村人が参加した大規模なデモに変わった。

なぜデモをしたかという点、ドフィスクラブで金さんが支配人としているとき、クラブのなかで黒人と白人とが喧嘩をした。金さんが仲裁しようとしたら、黒人がジャックナイフで金さんを刺した。それで金さんは病院に運ばれた。噂では死にかねないと。でも、まだ生きている。それで、「ここは韓国の地なのに、いくら米軍でもそのまま見ていられない」と。「黒人は全部リンチしよう」と。村の青年たちが棒一本ずつ持ってきて大騒ぎだった。ヘリコプターが飛んで黒人を基地内に運び入れ、黒人は逃げ回って。なかには黒人を助けてあげた韓国人もいる。黒人を隠してあげたりした。とにかく黒人と韓国人の間の大きい喧嘩だった。それで、オフ・リミッツになって米軍が（基地から）村に出られなくなった。

（李恵淑さん、72 才）

李恵淑さんは、花美里の暴動を上のように記憶している。しかし、クラブ内での黒人兵士の荒っぽい行動はこれが初めてでもなく、ずっと続いていた。軍隊内で人種差別が激しく、それ

が彼らの Rest & Recreation の場である基地村の花美里でも再現されたのが原因である。しかし、村人や売春女性から見ると、黒人兵士を差別したのは営業上の不利を避けるためであった。つまり、黒人兵士より白人兵士が3倍以上多い状況で白人を相手に商売を行おうとしたら黒人を排除するしかない。黒人を心よくクラブに入れたらそのクラブには白人のお客は来なくなるからである。売春女性が黒人にサービスを提供したり、一緒に寝たりしたら、白人からは完全に無視されたので、潜在的なお客を失うことになる。さらに、白人相手の売春女性が黒人を相手にしたことがばれたら、彼女は白人から暴力をふるわれる危険性まであった。

このデモ以前にもオフ・リミッツに対する売春女性のデモは多々あったが、このときは住民をも巻き込み長期間にわたる抵抗になった。以下は花美里事件に続いて生じたデモ（1971年）に参加した元売春女性の証言である。

村の経済が回らない。住民は住民なりに理由があってデモをする。私たちは私たちが食べられないからデモをする。本当に厳しかった。だからデモをするしかなかった。

雨に降られながら道路に横になって大騒ぎだった。当時私たちは何百人もいたと思う。本当に多かった。部隊に入るバスを阻止して中に入れないようにしたりする過程で喧嘩も多かった。梅雨最中だった。村のおばさんたちがコーヒーを沸かしてくれたり、おにぎりを作ってくれたりした。それで、結局私たちアガシ³⁰⁾たち、米軍クラブに通うアガシたちが全部デモをして終わらせた。正門を開けた。私たちの力がどれだけ大きいかわかる？

（林守子さん、68才）

このように基地村の売春女性たちは自分たちの利害に深刻な侵害があったときに一つになって抵抗した。売春女性たちと村人の利害が一致するときは村人の援助を受けながら、一緒に行動を起こすときもある。しかし、村人と利害が合致しないときにも彼女たちは自分たちだけで集まり、生存を危うくする権力に向かって立ち上がった。以下の事例にそのような姿が見られる。

（2）売春女性が殺された時の抗議

基地村では米兵によって売春女性が殺される事件がたびたび起こった。それらの事件に対する世間の視線は、「不幸な事件ではあるが、もともとそのようなところで売春をするということはある程度覚悟の上だったはずだ、しかたない」というようなものであった。基地村では「卑しい」女性が一人殺されても噂話にもならない [Jeong Yujin 1999]。そのような状況で、売春女性の人権を訴え、米軍に向かってデモを行ったのは、学生運動や社会運動のグループではなく、売春女性たち自身であった³¹⁾。

犠牲者の表象を乗り越えて語り始めた女たち（徐）

ここ（花美里）で米軍に殺された女性は三、四人ぐらい。そのときも女性たちが死体を埋葬した。女性たちが道路の中央に死体を置いて、お詫びしろ、あなたたちが殺したからお詫びしなさい。（朴玉嬪さん、68才）

78年度ここに来て間もないころ、UN クラブの近くで女性が死んだ。黒人に首を絞められて殺されたがそのときデモをした。私たちは死体を解剖しようと、死体を乗せた車を逃がさせまいとソウル薬局前の道路に横になった。（崔延晶さん、72才）

売春女性の死を悲しんだのも売春女性たち自身であり、死体を山に埋めたのも売春女性たち自身である。彼女たちは、世間の誰もが沈黙する状況で、唯一それを問題にし、抗議を行ったのである。

（3）靴の値段と女性の身体値段との同一視に対するデモ

以下は、花美里から少し離れたソントンで生じたデモである。当時の新聞記事をまず引用したい。

京畿道平澤の米軍相手特殊職業婦女会員³²⁾一千人あまりは、3日米軍基地正門の前で、米軍による韓国商品価格値下げ要求に対する抗議を3時間続けた。それは先月28日米軍300人あまりが運動靴や洋服そして売春の料金が高いのでそれを平均半分に値下げするように要求するピラを一千枚配布したことに対しての反発であった。この日会員たちは、売春料金云々のピラを配布した将兵の処罰とクラブ内での名札制廃止などを要求しながら米軍憲兵と対峙した。（『韓国日報』1971年5月4日付）

このデモを導いた金蓮子氏（実名、62才）³³⁾によると、クラブの売春女性たちは米兵がセックスを他の商品と同じように扱って、価格リストを作ったという事実に屈辱感を感じたという。「靴10ドル、ロング・タイム10ドル、カバン5ドル、ショート・タイム5ドル」のように。デモに参加した売春女性たちは、「どうやって誰が靴と女性の身体を同じ値段に定めることができるか、どうやってその価格リストを配布することができるか」と怒りをあらわにしながら、「We are not shoes, we are human beings!」と叫び続けた。

売春女性たちは、米兵のそのような行動をただ値下げを要求する経済的な問題として捉えていたのではなく、人権の問題として抵抗していたとみることができる。新聞記事で、ピラを配布した将兵の処罰とともに要求したのが名札制廃止であることも示唆に富む。名札は名前だけを表記するものではなく、性病検診番号をも意味した。売春女性たちは性病検診番号をつけて

仕事をしなければならない状況をまるで売られていくための動物になったように感じたと表現する [Moon 1997: 203]。

以上、元売春女性たちの語られた経験を再構築すると同時に、外在する権力（国家、米軍、資本主義経済など）と、その力に影響されつつ繰り広げる、ネットワークの形成や抵抗の身振りなど、個々人としての売春女性たちの対応を考察した。以下では売春を行ってきた自分自身への省察を取りあげる。

6 省 察 す る

売春女性には自分の生き方についてどのように考えているのだろうか。この節では彼女たちの自己省察を取りあげることで、犠牲者という一面的なイメージを克服し、彼女たちの視点を確保する。

そのときこのようなところにいた女性たちに後から指をさすのは間違いだと思います。……一ドルでも多くその人たち（米兵たち）の財布から出させて、国の経済を助けたのも私たちでした。今振りかえてみたら何でもなかったけど。わが国をこれだけ発展させたのも、われわれ女性たちだと言っても過言ではありません。そして、この社会がわれわれのような基地村の女性たちに寛大でないことは、国の間違いだと思います。……わが国をこれほど発展させたのは私たちでした。それを全然分かってくれないからもどかしいです。
(申貞美さん, 52才)

私たちは世の中の人たちに捨てられ、全ての人たちが私たちに後ろ指を指しながら非難しても、私たちも堂々と生きたいと願う気持ちはある。もし、私たちががいなかったら花美里の主婦たちに何も起こらなかったと言える？ 私たちのように犠牲になる身体があるからこの花美里の主婦たちも無事に過ごせたのでしょ。私たちは生計のために出てきた³⁴⁾ (나왔는데) が、(非難されるのが) 悔しい。
(金蘭香さん, 62才)

彼女たちは、経済的な面でドルを稼ぎ、社会的な面では米兵と一般社会を隔離させる緩衝地帯の役割を果たしたことを認識している。それは、国家が基地村を存続させた理由と見事に一致する³⁵⁾。彼女たちは生計のために売春に乗り出し、上で述べたように、二つの役割を担わせたにもかかわらず、自分たちに浴びる非難が不当だと思っている。世間の非難に対して「悔しい」または「間違っている」と言う彼女たちは、自分たちが罪深い人生を生きたと思わない。「生きるために努力した」と思っている彼女たちは、主流社会の目で自分たちの人生を批判し

たり、罪の意識に悩んだりするのではなく、自分たちの目で評価し、むしろ主流社会が無理やり自分たちに押す烙印に大きく不満を表しているのである。

私が引っ越してきたときもここがなんというか怖くて。しかし、女である私が子どもを育てるためにここに来ました。人々が「淪落女性」や、「淪落慰安婦」と呼ぶとき、それがどういう人か私も知りませんでした。しかし、実際その人たちも一人一人会って話してみれば、純粋な心もあって優しい人も多いです。ただ食べて生きるために、生計のためにそのようなところに入って（売春？）する³⁶⁾のは、私は悪いと思いません。私もそのなかで働きましたが、詳細なことは話したくないです。その女性たちはそこで働くと言って全部駄目な女性でもなくて、実際知り合ったらいい人も多かった。私が思うには、その人たちは生きるために努力した。

（朴香純さん、63才）

朴香純さんは自分が基地村で売春を行っていたことを隠さず話しながらも、次の瞬間同じ立場にいた女性たちを「その人たち」と呼び距離を置いている。距離の置き方も「あの人たち」ではなく「その人たち」であるのはどのように理解できるだろうか。彼女は私の作業を「その人たち」を代弁する試みであると理解し、自分には代弁者が要らないという意味だったと推定できる。

自ら（基地村に）入ってきた。私が自分で自ら入ってきて（売春を？）した。誰かが「おまえこれをしないと殺すぞ」とは言っていないでしょう。パルジャ（팔자 定め）が悪くてこの世界に迷いこんで、もう婆さんになっているけど、でも私は私の人生が悲しかったとかは思わない、失敗したとは思わない。私は私なりに人間らしく生きた。誰かに後ろ指を指されても当然のような生き方をしたとは思わない。

（姜純心さん、61才）

サンリット・シスターズ・センターの開院3周年記念式が行われたときに印象的な光景を目撃した。貴賓として招待された方が記念スピーチを行っている最中、一人の会員が回りの止める手を追い払って立ち上がり、会場を去ってしまった。基地村の売春女性たちは、貧困のために売春をさせられた社会的・歴史的な犠牲者であるという趣旨のスピーチがまだ終わらないうちに、彼女はそれ以上聴くことを拒否し帰ってしまったのである。この女性の行為は、上記の姜純心さんの言葉を身をもって証言したのと同じかもしれない。このような女性たちの生を、犠牲者だとして片付ける権利を、誰が持っているのか疑問である。

7 お わ り に

本稿のはじめに、基地村で米兵を相手に売春を行う女性たちについて「犠牲者」もしくは「被害者」という主流社会からの表象を問題に挙げた。

そして、米兵を相手にした元売春女性たちの経験の語りから 1950 年代から 80 年代初期までの基地村での彼女たちの生活世界をできるだけ可視化するようにとつとめた。特にそれらを通して試みたのは、「売春女性」＝「犠牲者」というアカデミズムを中心とする主流社会からあてがわれた表象を解体する作業であった。それは、抽象的なイメージで彼女たちを社会の犠牲者として片付けてしまうことで、彼女たちを結果的に排除してしまうという危険性を克服するためであり、基地村の売春女性たちが持つ多様な側面に注目したいためであった。このような視角から売春女性を一人一人の個人として認めたとき、彼女たちはさまざまな場所でお互いつながり、連帯しているのが見えてきた。そして、このようにつながり、連帯した売春女性たちは、自分たちを取り巻く環境が厳しくなる度に、国家や米軍当局、そして、自分たちの利益を搾取しようとするあらゆる集団に対して抵抗しようとした。それは、時にはデモのようにはっきりとした抵抗である場合もあれば、構造の中に留まりながらも日常的に繰り広げる抵抗である場合もあった。このように基地村の売春女性たちが、つながり、抵抗する場面に注目すると、彼女たちの姿に「可哀想な犠牲者」のイメージでは捉えきれない重要な側面が浮き彫りになった。

本稿は、韓国の米軍基地村の元売春女性たちの経験の語りから、彼女たちの生活世界を可視化することによって売春女性の犠牲者性を否定することなく、今までの研究で無視されがちだった彼女たちの行為主体性（エイジェンシー）を浮き彫りにし、売春女性が「行為者」でありうる側面を切り捨てない視点を提示した。

売春女性が置かれた韓国での現状を考慮して、犠牲者論を検討するという形で本稿の議論を進めた。そして、行為主体性に注目することで、従来の韓国人売春女性＝犠牲者についてのイメージを払拭することができたと思う。では、冒頭で指摘した、売春女性を労働者ととらえ、その主体性を認める「行為者」論の立場については何が言えるだろうか。売春女性を労働者ととらえることで否定されてきた権利を保障すべきだという主張は彼女たちの地位向上という点からは重要かもしれない。だが、行為主体性を認めることは、それ以上の意味を持つことを忘れてはならない。本稿からも明らかなように、売春行為やそれをめぐるさまざまな事実（出産など）は労働に換言することはできないからだ。

本稿は、抵抗に参加できない女性たち、語ることなく過去を隠し続ける女性たちがいることを否定しない。しかし、彼女たちもまた日々の生存をかけて生活を勝ち取っていると考えたい。これからも、まだ会えぬ、語ろうとしない彼女たちに会うこと、そういう出会いが触媒となって彼女たちの言葉に耳を傾けていきたい。

謝辞 本稿は、2006年に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文の一部を加筆、修正したものである。同年日本文化人類学会、日本女性学会、アメリカ人類学会で発表した際に頂いたコメントを活かそうと努めた。フィールドで出会った方々、お話を聞かせてくださった方々、そして、Sunlit Sisters' Centerの禹順徳院長には物心両面の支援を頂き、お世話になった。論文執筆にあたり、京都大学の田中雅一先生のご指導を賜った。また、京都大学の菅原和孝先生、山田孝子先生と鄭柚鎮さんをはじめ多くの方から非常に適切で有益なコメントを頂いた。ここに深く感謝致します。

注

- 1) これは、米軍基地周辺に米兵の日常的な必要物品の調達や Rest & Recreation のためのサービスを提供することを目的に形成された村である。Rest & Recreation の字義は「休息と休養」であるが、基地村でこれは「酒と女」の同意語のようである。そして、米兵に提供するサービスが主に売買春に関わる性的サービスであるために基地村という言葉自体否定的な意味を含んでいる。しかし、物理的に米軍基地周辺に位置する村でも、その経済が主に農業などに依拠していれば基地村とは呼ばないし、韓国軍基地周辺の売買春関連地域を抱えている村も基地村とは呼ばない。そこから、基地村という言葉は、圧倒的な力を背景に優位に立つアメリカとそれに依存するしかない基地村の韓国人の存在が、否定的な意味を加えているとも言える。
- 2) 「売買春」をさす用語の変遷は韓国社会の関心の変化に対応して、淪落・売春・売買春・性売買に変わってきた。以下にその変遷と用語の含意をたどるが、本稿では買春する側の米兵と売買春を成り立たせる性産業に焦点を当てるものではないという意味で、売買春や性売買という用語ではなく、主に売春、売春女性という用語を用いる（括弧は題目だけにつけるが、本稿でのこれらの用語はすべて括弧つきの意味である）。ただし、売春する側に焦点を当てることなく、金銭を媒介に行われる性交渉を現象として示す場合は、売買春という用語を用いる。性売買という用語は2004年9月23日から施行された「性売買特別法」との関連で、売春女性を性売買被害女性と呼ぶことを喚起させるため用いない。しかし、参考文献の翻訳または先行研究の引用の際は原文を重視する。

米軍基地村で売春を行う女性についての NGO 団体の報告書などでは「基地村女性」という用語が見られる。それは売春という用語を避けようとする婉曲語法だと思われるが、概念が曖昧なため本稿では「基地村売春女性」という用語を用いる。

1961年制定された「淪落行為等防止法」のなかで規定されている淪落行為とは、「不特定の人を相手に金品及びその他の利益を授受するか、それを約束して性行為をすること」（第2条第1号）だとしている。ここで「淪落」とは善良な性風俗を害する不道德な行為として捉えることで淪落の辞典的な意味のように「女性が墮落して身体を売る状況に陥った」という、性道德的・性倫理的判断が前提された。この用語は一般に広く使われ、後から登場する用語と共存し続け、2001年に書かれた論文 [Bae Jongho 2001] でも未だに淪落という用語を用いている場合もある。

1980年代には淪落という用語を批判しながら、登場したのが「売春」であるが、1990年代になると「売春」が性売る側の女性だけを問題にすると批判し、「売買春」という用語に代替しようとする努力が展開された。「売買春」は、「淪落」の道德的観点から交換関係という社会経済

的な観点に移ったにもかかわらず、「春」という言葉のせいで性を取引する行為または満たすべき性欲というものを自然主義化してしまい、社会構築的な性格がうすれてしまうという問題を抱えていた。また、この用語は性を売る人と買う人という二者関係にだけ焦点をおくことで中間媒介者が見えなくなる問題などが新しく批判され、最近「性売買」という用語が登場した。

Won Mihye [1999] は、「性売買」という用語を性が取引される側面——性を買う人と売る人、そして彼らを繋げる中間媒介者、性産業——を強調するために適切なものとして提案している。それに、Paek Jaehui [2000] は、現代の性の取引が性交だけではなく、多様な性的サービスや性の商品化を意味するために、性交を中心に意味化される売買春という用語より、性売買が適しているとしている。

各用語に対応して女性に対する用語も変わるが、「淪落」に対して「淪落女性」、「売春」または「売買春」に対して「売春婦」・「売春女性」、そして「性売買」に対して「性売買被害女性」になろう。最近「性売買」という用語を受け入れながらも「性売買被害女性」という用語に違和感を覚える人たちは「性売買女性」という用語も用いるが、「買う」側の女性を取りあげないかぎりそれは間違いだろう。

Jeong Huijin [2005] は、性売買という用語を受け入れながら、女性に対する用語として「性販売女性」もしくは「性販売者」という用語を提案している。しかし、性売買女性という用語がただ現象を記述的に述べることで、売春という行為に作用するジェンダーやセクシュアリティをめぐるさまざまな力を意図せずにしろ、覆い隠してしまう問題がある [Pak Miseon 2006]。

- 3) 売春女性の表象は一般社会のそれとアカデミズムのそれとは異なる。本稿では主に売春についての学術論文の中で表象される売春女性を射程に入れているが、一般社会のそれはどちらかというと、道徳的に墮落し、汚く、嫌悪の念を呼び起こす、強いて言えば「汚れモノ」である。しかし、それとともに社会問題を告発するルポルタージュなどではアカデミズムと同様犠牲者像が支配的である。一般社会における基地村売春女性についての表象もまた大きい問題を孕んでいるが、詳しい分析は次の機会に回すことにする。もしくは、「犠牲者像」は「汚れモノ」の裏返しではないのかと疑いたい。「汚れモノ」であることがそれに対する思考の停止を正当化すると同じく、「犠牲者像」は基地村の売春女性をめぐるさまざまな問題を覆い隠してしまっているのである。
- 4) 売春女性を犠牲者ではない視角で描いた文献やドキュメンタリー映画は少なくとも存在する。それらは主に長期間にわたる NGO 団体での現場活動家によるものであるか、彼らとの共同作業の成果として大変貴重なものである。Jeong Huijin [1999], Magdalena-ui-Jip(編) [2002] と、ドキュメンタリー映画 Pak Kyeongtae (박경태) 監督の『わたしとフクロウ』[2003] などがある。
- 5) 1961 年「淪落行為（売買春）を防止するため、淪落行為をしているかもしくはする恐れがある者を善導する目的」で制定された法律で、1999 年まで 5 回改定されながら、2004 年の「性売買特別法」に取って代わられるまで継続した。
- 6) 西洋人を相手にする売春女性を皮肉って卑下する言葉。「洋」は西洋あるいはアメリカを意味し、「公主」は姫様の意味。強くスティグマ化された言葉。
- 7) その背景には次のような社会的認識があったと言える。

韓国人を相手に売春を行う女性たちに対しては非難しながらも、一方では彼女たちが売春に乗り出した理由が「生活苦」であることを絶えず想起させ、同情と憐憫をかもし出した。しかし、米軍を相手に売春を行う女性に対してはその動機が「生活苦」であるとしても許さなかった。だ

から、彼女たちは、この土地から掃き捨てるべき汚れモノのように捉えられた [Yi Imha 2004: 97]。

- 8) 1990年代 Paju 郡誌編纂の調査によると、1950年代には米兵と一緒に歩く女性たちを見たら子供でさえつばを吐いたり、石を投げたりしたという [Kim Hyeoseon 1995: 763]。韓国のように「長幼有序」の道理が重んじられている社会で、子供が大人に向けて「つばを吐いたり、石を投げたり」する行為が許されたということは、基地村の売春女性が社会成員として認められていないことを語っている。それは、そもそも自民族の女性のセクシュアリティは自民族の男性に属すべきだという考え方を持つ民族主義と家父長主義にとって、異民族の男性に犯された自民族女性の存在それ自体が、自分の所有物であるべきモノを自分の力で守れず、異民族の男性にわたすしかない無力、侮辱、深く傷つけられた男性性をあらわにするので、その女性の存在は否定したいものである。だから、その女性を自民族の範囲から追い出し、異民族の位置に置こうとする試みが見られる。例えば、白人兵士を相手にしていた韓国女性を「白人女性」と、黒人兵士を相手にしていた韓国女性を「黒人女性」と呼んでいたことと洋公主、洋セクシ（注17 参考）の用語も韓国人のカテゴリーから押し込めようとする試みとしてみることもできるだろう。
- 9) 彭城邑事務所で参照した統計資料による。
- 10) クラブは、店の規模が大きく一つ以上のセクシー・ダンスのための舞台を設けており、バーよりもろもろの性的サービスが期待され、「2次」もしくは「ナイト・アウト」と呼ばれる売買春の可能性を強く持つお客とのプライベートな時間がオーナーを通して交渉される。つまり、お客は直接女性に代金を支払わず、オーナーに払って、女性はオーナーからコミッションを受け取る形になる。しかし、バーで働く女性の場合は、売春は個人的な交渉で行われ、オーナーは立ち回らない。ドリンク・コミッション以外の基本給料もバーのほうが高い。最近ではクラブで働く女性は、大体フィリピン人女性で、バーで働く女性は韓国人の女性である場合が多く、国籍による分業化とそれによる階層意識が認められる。この点については別稿を用意している。
- 11) 官民のために官庁に所属されていた妓生。最初は宮中の女樂を担う目的であったが、だんだん地方官庁まで拡大されながら守令の「慰安」対象になっていった。卑民階級で母から受け継いで妓生になり、妓籍に登録された [Yahoo 百科事典参考 <http://kr.dic.yahoo.com> 2006.8.25.]。
- 12) 高麗・朝鮮時代に社会的支配階層を形成した官僚組織。本来は、国王の朝会るとき国王に対して東側と西側に立つことから東班と西班とに分かれていた。これらを合わせて兩班と称したことに由来し、文武官僚を意味した [Yahoo 百科事典参考 <http://kr.dic.yahoo.com> 2006.8.25.]。
- 13) 日本植民地政策との関連は Kang Yeongsu [1988], 山下英愛 [1992], Pak Jongseong [1994] に詳しい。韓国経済の「従属的發展」と風俗産業の繁栄の関連性については申惠秀 [1991] に詳しい。
- 14) どうして友邦国の軍隊に支払える社会的な費用に自民族の女性のセクシュアリティが自然に想定され、共通の認識が作られるのか、また、女性への被害を阻止できない国家安保はどのような安保なのかは問われるべきであろう。
- 15) ニクソン・ドクトリンにより在韓米軍の減縮が推進されると、1971年の選挙で微々たる得票差異で当選した朴正熙は政権維持に不安を感じた。それを払拭するために米軍駐屯の持続が不可欠だった韓国政府は、在韓米軍が以前から要求してきた基地村の環境改善を積極的に受け入れ、1972年から「基地村浄化事業」を行うことになる。その事業の核心は基地村の売春女性に対する性病管理による「浄化」であった。
- 16) 「社会的に意図された」未知の領域という意味で使う [Moon 2005]。米軍基地と基地村がそ

こに存在するという意味では可視化されている。しかし、そこで実際何が起きているのかに無関心であるし、またそれを知らないということが正当化もしくは正しいという認識があり、可視化されているが同時に非可視化されている領域という意味を含んで使う。

- 17) 「洋」は洋公主と同じく西洋を意味し、「セクシ」は結婚したばかりの若い女性の名称。洋公主と同じく皮肉って卑下する言葉。
- 18) 引用された語りの話者の名前はすべて仮名である。
- 19) 本来は姉についての名称、呼称。一般的には自分より若干年上の女性を、親しみをこめて呼ぶ呼称で広く使われる。しかし、基地村では女性であれば年齢も関係も問わず、誰でもかまわない、というふうにおンニという呼称が使われたので、オンニと呼ばれることを嫌う元売春女性もいる。
- 20) オビ (OB) は韓国の代表的なビールの商品名。バーの内側で瓶ビールの蓋を開けるのが仕事の内容。
- 21) ウェイトレスの仕事は名称どおり注文を受けとり、飲み物をテーブルまで運ぶのが主な内容だったが、チップが収入を大きく左右する環境の中でテーブルに座って一緒に話したり、売買春交渉に応じたりした。
- 22) インタビューの中で、女性たちによってたびたび使われる日本語に出会う。例えば、アイノコ、ママさん、階段、弁当などがある。ヒッパリもその中の一つであるが、それは日本植民統治時代に公娼制度が認定されたのと無関係ではないだろう。また、売買春関係の特殊用語以外の日常用語も使われるが、70代の女性たちには日本植民統治時代に小学校に通った人もいる。
- 23) 彼女たちは売春という言葉の代わりに、「米軍相手」という表現を用いる。
- 24) この形態は性交渉の度に代金を払う形ではなく、米兵の給料日にいくらか生活費を受けとる形だったので、主婦と売春女性の間の連続性を考えさせるものである。
- 25) 韓国には成人になった混血の人 (1994年パールバックの統計で370人程度 [Kim Hyeonseon 1997]) が存在する。しかし、その人たちを指す一般の用語が存在しない。それで彼らは「混血児」、つまり子どもとして表現される。例えば、インターネット掲示板に見る「わが国の混血児の芸能人は誰々」云々。これは韓国社会のなかで彼らがどれだけ非可視化されているのかを物語る。
- 26) 出入禁止。兵士に対してあるクラブもしくは基地村全体に出入禁止を命令すると基地に多大に依存しているクラブや村の商売が成り立たない。
- 27) 郡守は道知事に推薦され大統領に任命された郡の最高行政責任者である。韓国の行政区画は、市・道>郡>邑>面に分けられる。平澤は1995年に都農複合市になるまで平澤郡であった。
- 28) 「菊の会」は以前米軍を相手していた女性たちの自助グループである。1992年、年を取って一人暮らしをしている女性たちがお互い助け合うために結成された。「菊の会」は朴政権のとき結成された婦女会とは異なる。この村の一人暮らしの女性たちは自助グループの必要性は感じていたが、きっかけがなかった。その時、Yi Jayeon氏が国会議員の選挙に出馬し、得票を狙って自助グループの結成を後援した。しかし、Yi Jayeon氏が後援しなくなった今も「菊の会」は持続している [サンリット・シスターズ・センター 2005: 5 (「菊の会」総務金氏とのインタビューのまとめから)]。
- 29) 陰暦8月15日の年中行事の一つ。秋の収穫を祝う行事。
- 30) 若い女性に対する呼称、名称。本来は身分の高い未婚の女性に対する呼称であったのが、だんだん性的接近が可能なお店で働く女性に対する名称、呼称に変わった。未婚の義理の妹に対する呼称の場合は本来の意味に近い。基地村の売春女性は自分たちを指す用語として、「アガン、セ

クシ、女たち、私たち」を用いた。

- 31) Hearing the news the same day, about 200 prostitutes carrying sticks demonstrated outside the American camp demanding immediate arrest of what they called a 'GI murderer'. (*Stars and Stripes* 1971.7.28)

300 Girls Stage protest Funeral March. (*Korea Times* 1969.5.15)

- 32) セマウル運動（새마을운동 1970～）との関連で組織された「主婦」たちの婦人会と区別するために「特殊職業」という言葉を用いていると思われる。しかし、一般に「職業女性（직업여성）」という用語が「売春女性」の意味で使われていることを考えたら、「売春」が特殊な職業であるという意味だけではなく、女性が職業を持つこと自体が社会の規範から外れた特殊な現象であるという意味も持っていると思われる。「職業女性」が「売春女性」の意味で使われている事例は2004年の新聞記事でも見つけられる。

- 33) 25年間基地村で米兵相手の売春を経て、現在基地村の女性たちのための活動家になった女性で、2005年自叙伝を出版した。私とのインタビューの中で彼女は自叙伝を書くようになった理由について以下のように話した。

「一般の売春女性はそれが英熙であれ、順熙であれ知られているが、どうして基地村の話はただ観念的で抽象的であるのか……（研究者と活動家たちとのスピーチ・ツアーのときに）どう考えても彼らが発表するミリタリズム、軍事主義、これは抽象的な話で、私に言わせると。私は固い話とはよく理解できないが、昔外国人女性たちが研究した文献に基を置いて、抽象的な部分が多いですよ。それで、私はそこで仕事をしながら刺激を受けて、それで、私が自分を裸にさせてみよう（自叙伝を書いてみよう）と。……海外でのセミナーとかでも、〇〇氏は、自閉症から立ち直り、高校2年で中退した学業を検定試験にパスして高校卒業状を得て、大学入試資格も得た△△という青年がいるのだが、それを、同情を買うために、ソントンの△△学生は狭い自分の部屋から出てこないし、夏にも毛布をかけて、食べ物ばかり買ってくれとねだると（いう内容の発表をする）。過去にそうだったかも知れないが、そこから立ち直って部隊正門の前のオリンパスというベッドを売る店でちゃんと働いているし、試験にパスして高校の卒業状も得たのに、それは評価しないで否定的な面ばかり紹介して。また、いまDDCの誰かさんは子供が二人いるが、一人がベッドの下で寝ながら母の売春現場を見なければならない状況だとか。そうだから私は負担に思う。少し肯定的な面も知らせて、例えばすでに基地村活動チームが入ってきてチャンサラン（真の愛）宣教院というところも開いている。仕事をしていたら、否定的な面も肯定的な面もあるのだが、ひたすら悲しい方向に走らせるから、精神的にも辛くて。」

- 34) 韓国語で場所が言及されず「出る、出かける（나가다 nagada/ 나가요 nagayo）」と言われるときは特殊な意味で使われる。風俗産業で働いている女性が夜の仕事のために「出かける」という意味で、動詞の「나가요 nagayo」がそのまま「（風俗産業に）出る女 / 出かける女」を意味する名詞としても使われる場合もある。例えば、濃い化粧をした友人に違和感を現すとき、「너 화장이 '나가요' 같애 / 今日の化粧は 나가요 nagayo みたい」と表現する。ここでは話し手が「出る」当事者なので「出てくる / 나오다 naoda」の過去形が使われている。

- 35) この一致をどう考えるべきか。自己正当化のための戦略として受け入れられそうな言説を使っているように思われる。

- 36) 韓国社会で「売春」という言葉は極限にまで避けられる。この話者は目的語に相当する「売春」という言葉を代替語に変えず、目的語抜きで「する」という動詞をそのまま使っている。

参考文献

- Bae Jongho (배종호), '接客서비스업 여성종사자의 윤락실태에 관한 연구:대전광역시를 중심으로' 한남대지역개발대학원 석사논문, 2001 (訳:『接客サービス業の女性従事者の淪落実態に関する研究:大田広域市を中心に』韓南大学地域開発大学院 修士論文)
- Barry, Kathleen, *The Prostitution of Sexuality*, New York University Press, 1995
- Choe Byeongil (최병일), '성매매 근절을 위한 정책연구', 숙명여대정책대학원 석사논문, 2004 (訳:『性売買根絶のための政策研究』Sukmyeong 女子大学政策大学院 修士論文)
- Hei-Soo, Shin (신혜수 申蕙秀), *Women's Sexual Services and Economic Development: The Political Economy of the Entertainment Industry and South Korean Development*, Rutgers University, Ph.D dissertation, 1991 (『韓国の風俗産業の政治経済学:従属的發展とセクシュアル・サービス』, 金早雪訳, 新幹社, 1997)
- Hwang Changyong (황창용), '매춘여성의 사회복귀를 위한 프로그램 연구-민간단체 프로그램 분석을 통해서', 평택대 사회개발대학원 석사논문, 1998 (訳:『売春女性の社会復帰のためのプログラム研究:NGO団体のプログラム分析を通して』平澤大学社会開発大学院 修士論文)
- Jang Pilhwa (장필화), "여성, 몸, 성", 또하나의 문화, 1999 (訳:『女性・身体・性』もう一つの文化)
- Jeong Huijin (정희진 鄭喜鎮), '죽어야 사는 여성들의 인권:한국기치촌운동사', "한국여성인권운동사", 한울아카데미, 1999, pp.300-358 (訳:「死んでこそ生かされる女性たちの人権」『韓国女性人権運動史』山下英愛訳 明石書店 2004)
- "페미니즘의 도전:한국 사회 일상의 성정치학", 교양인, 2005 (訳:『フェミニズムの挑戦:韓国社会における日常の性政治学』, 教養人)
- Jeong Yujin (정유진 鄭柚鎮), '양섹시의 인권?' "기독교사상" 490호, 1999, pp.145-152 (訳:「洋セクシの人権?」『キリスト教思想』)
- Ji-Yeon, Yuh, *Immigrants on the front line: Korean military brides in America, 1950-1996*, University of Pennsylvania, Ph. D. dissertation, 1999.
- Kamala, Kempadoo & Jo, Doezema, *Global Sex Workers: Rights, Resistance, and Redefinition*, Routledge, 1998.
- Kang Yeongsu (강영수), '한국사회의 매매춘에 관한 연구:용산역 주변 매춘여성을 중심으로 한 사례연구', 이화여자대학교 석사논문, 1988 (訳:『韓国社会の売買春に関する研究:ヨンサン駅周辺の売春女性を中心にした事例研究』, 梨花女子大学大学院 修士論文)
- Katharine H. S., Moon, *Sex among Allies*, Columbia University Press, 1997.
- '한국 기지촌의 여성 Women in Korea's Kijichon', "한국현대여성사" 정진성 / 안진의 지음 한울아카데미, 2004, pp.121-140 (訳:「韓国基地村の女性」『韓国現代女性史』Jeong Jinseong & An Jin 編 ハンウルアカデミ)
- '기지촌에서 세계로', "아메리카 타운 왕언니 죽기 오분 전까지 악을 쓰다", 삼인, 2005, pp.301-303 (訳:「基地村から世界へ」『アメリカタウン王オンニ, 死ぬ5分前まで叫ぶ』, サンイン)
- Kim Hyeonseon (김현선), "기지촌, 기지촌여성, 혼혈아의 실태", 세움터, 1997 (訳:『基地村, 基地村女性, 混血児の実態』, 세움터)
- '성매매의 폭력적 특성과 성매매피해여성의 외상후 스트레스 장애' 성공회대시민사회복지대학원 석사논문, 2002 (訳:『性売買の暴力的特性と性売買被害女性の外傷後ストレス障害』)

SungKongHoe 大学 市民社会福祉大学院 修士論文)

Kim Hyeonsuk (김현숙), '성매매피해여성의 사회적 보호에 관한 연구', 원광대 행정대학원 석사 논문, 2005 (訳:『性売買被害女性の社会的保護に関する研究』 Wonkwang 大学行政大学院 修士論文)

Kim Hyeoseon (김효선), '주한미군과 파주사회' "파주군시 (하) 현대사회", 1995 (訳:「在韓米軍と Paju 社会」, 『Paju 郡誌 (下)』, 現代社会)

Kim Ilyeong & Choe Seongyeol (김일영, 최성열), "주한미군: 역사, 쟁점, 전망", 한울아카데미, 2003 (訳:『駐韓米軍: 歴史, 争点, 展望』, ハンウルアカデミ)

Kim Yeonja (김연자 金蓮子), "아메리카 타운 왕언니 죽기 오분 전까지 악을 쓰다", 삼인, 2005 (訳:『アメリカタウン王オンニ, 死ぬ 5 分前まで叫ぶ』, サンイン)

Kim Yonghan (김용한), '다름을 넘고 같음을 찾아 강력한 국제 연대를 위하여: 오키나와와 평택의 미군기지 반대 운동 비교' 평택지역 미군기지운동 대토론회 자료집, 미군기지확장반대평택대책위원회, 2003, pp. 6-27 (訳:「差異を乗り越え一つの地点を模索する強力な国際連帯にむけて: 沖縄と平澤の米軍基地反対運動の比較」, 『平澤地域米軍基地運動大討論会資料集』, 米軍基地拡張反対平澤対策委員会, 2003)

Magdalena-ui-jip (ed.) (막달레나의 집 엮음), "용감한 여성들, 늑대를 타고 달리는", 삼인, 2002 (訳:『勇敢な女性たち, 狼に乗って走る』, サンイン)

Martha C. Nussbaum, Whether from Reason or Prejudice: Taking money for Bodily Services, *Journal of Legal Studies* vol. 27, pp.693-709, 1998.

Paek Jaehui (백재희), '외국여성의 한국 성산업 유입에 관한 연구: 기지촌의 필리핀여성을 중심으로', 이화여대대학원 석사논문, 2000 (訳:『外国女性の韓国性産業への流入に関する研究: 基地村のフィリピン人女性を中心に』 梨花女子大学大学院 修士論文)

Pak Jongseong (박종성), "한국의 매춘: 쾌락의 실재와 구원의 부재", 인간사랑, 1994 (訳:『韓国の売春: 快楽の実在と救援の不在』, 人間サラン)

Pak Miseon (박미선), '성노동, 성매매, 변혁적인 개념화와 엄밀한 이론화를 향해서', "여성이론", 통권 제 14 호, 2006, pp.205-226 (訳:「性労働, 性売買, 変革的な概念化と厳密な理論化にむけて」『女性理論』第 14 号)

Patricia, Whelehan, *An Anthropological Perspective on Prostitution: The World's Oldest Profession*, The Edwin Mellen Press, 2001

Sandra, Pollack Sturdevant & Brenda, Stoltzfus, *Let the Good Times Roll: Prostitution and the U. S. Military in Asia*, New Press, 1993.

Sunlit Sisters' Center, "햇살이야기", 2005 (訳:『サンリット物語』, 不定期刊行物)

Wendy, Chapkis, *Live Sex Acts: Women Performing Erotic Labor*, Routledge, 1997

Won Mihye (원미혜), '한국사회의 매춘여성에 대한 통제와 착취에 관한 연구', 이화여대대학원 석사논문, 1997 (訳:『韓国社会の売春女性に対する統制と搾取に関する研究』 梨花女子大学大学院 修士論文)

'우리는 왜 성매매에 반대하는가', "섹슈얼리티 강의", 한국성폭력상담소, 동녘, 1999 (訳:「私たちはなぜ性売買に反対するのか」『セクシュアリティ講義』韓国性暴力相談所トンニョク)

Yi Imha (이임하), '1950 년대 여성의 삶과 사회적 담론', 성균관대학교대학원 박사논문, 2003 (訳:『1950 年代女性の生と社会的言説』 成均館大学大学院 博士論文)

"계집은 어떻게 여성이 되었나", 서해문집, 2004 (訳:『女はいかに女性になったのか』, 西海文

集)

青山薫 『『セックスワーカー』と『性奴隷』のはざまで暮らす、普通の女たち』『女性学』13号
日本女性学会 新水社, 2006, pp. 76-93.

浅野千恵 「混迷するセックスワーク論」『現代思想』, 1998, 7 所収, pp. 117-125.

江原由美子(編) 『性の商品化：フェミニズムの主張2』, 勁草書房, 1995.

田中雅一 「主体からエージェントのコミュニティへー日常の実践への視角」『日常の実践のエスノ
グラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』田辺繁治/松田素二編 世界思想社,
2002, pp. 337-360.

林博史 「東アジアの米軍基地と性売買・性犯罪」, 『アメリカ史研究』, 日本アメリカ史学会, 第29
号, 2006, pp. 18-35.

ミヒナタリー・ルモワヌ, 「国家・人種・文化ー三つの壁と戦う」, 『前夜』, 2004, pp. 81-96.

メアリ・ダグラス 『汚穢と禁忌』塚本利明訳 思潮社, 1985 (1969)

山下英愛 ‘한국 근대 공창제도 실시에 관한 연구’ 이화여자대학교 석사논문, 1992 (訳:『韓国近
代公娼制度実施に関する研究』梨花女子大学 修士論文)

韓国語の表記は韓国文化観光部が2000年7月7日に公表したローマ字表記に従った。